



第六章・希望の燈火・前編

多くの人々がせわしなく基地内を駆けまわっているのを、私は耳だけで聞いていた。時折、医者らしき人物が私の様子を見に来るが、皆足早に立ち去ってしまう。

らしき、と言うのは、彼らが例外なく目すら覆い隠す完全防護の防疫スーツを身に纏っているため、男か女かすら判断できないのだ。

私はベッドの上で、指先を動かすだけで軋む体に舌打ちして、その音すらも痺れたように頭に響く。

惑星全球凍結という宇宙でもなかなか珍しい現象は見たえがあったが、すぐに私の体はそれどころではなくなってしまったのだ。

ランビュランス第二宇宙基地にCS計画実行部隊が接近していたのは、ベルダの仲間の研究者達に、灼死病の罹患者が出たからだだった。

コロが言う『回避された宇宙基地』だった第二宇宙基地は、エルドラムが実績を積んだ場所であるということと、ベルダ達が研究を継続していたから、という二点に於いて、エルドラム独裁体制下でも有用であるとみなされていたのだろう。

だが、灼死病の発症が確認された以上、政権側にはこれ以上配慮する事情が無くなってしまった。

そしてそんな場所に、私達は何の防疫対策も施さぬまま、生身で乗り込んだ。あまりに自分の行動が軽率で、お粗末で、涙も出ない。

私はランビュランス第二宇宙基地から本星に至るまでの僅かな間に、灼死病に感染してしまったのだ。

ベルダの慌てぶりは相当なもので、あつという間に私は艦のメディカルルームに隔離され、艦の指揮権をコロと、一応は銀河連邦軍人であるフィデルに託すことになってしまった。

ランビュランス本星には、一切の妨害なく着陸できた。

ベルダの協力者であり、恐らくクルトも一枚噛んでいるであろう、現独裁体制への反旗を翻すためのレジスタンスとでも呼ぶべき組織。

彼らが確保している凍りついた工業地域の地下区画に收容され、私は改めて隔離された。自分で発症して改めて、この灼死病という病の恐ろしさを実感した。

体の内側が燃えるような痛みと熱が絶え間なく続き、全身の機能が一気に低下するのだ。

リーシュ達には同様の症状が全く見られないので、彼女達は現状感染してはいないのが救いだ。

ランビュランス本星では、灼死病は一応の封じ込めに成功している。

灼死病ウィルスは低温下では極端に活動が鈍くなる性質があるらしく、摂氏気温10度未満の温度で、完全に活動を停止するという。

だが、恒常的に摂氏気温が10度を下回る場所が惑星に占める割合などごくわずか。そしてヒューマノイド型知的生命体の平熱は、どれほど種を拡大しても20度未満になることは決してない。

つまり、人体に入り込んだが最後、灼死病の活動を停止させる方法は存在しないのだ。

CS計画、つまりはコールドスリープによる極低温下による生命維持措置を施し、未来に於いて病理的な解決が図られるのを待つしかないのである。

「……艦長」

くぐもった声に目だけを向けると、そこには防疫服に身を包んだリーシュが立っていた。彼女の特徴のある虹色の瞳は、防疫服越しにもよく分かる。

声を出すのも辛いので、私は目だけで領いた。

「体調は……良くはないわよね」

仲間に心配をかけたくはないが、こればかりはもうどうにもならなかった。

「研究者達や地下区画の責任者の人は、みんなあたし達に感謝してくれてるわ。ベルダをここまで連れてきて、エルドラムやクレーマン博士のデータをサルベージしてくれたこと。もしかしたらそう遠くないうちに、血清ができるかもしれないって、盛り上がってる」

それは良かった。

クレーマン博士の研究室に残されていたデータには、クレーマン博士とエルドラムが研究を重ね、灼死病に対抗するためのあらゆる病理的な実験の成果が克明に記録されていた。

抗体療法が不可能なのは現状の話であり、人間以外の灼死病宿主を人為的に作りだしたり、罹患した人間の抵抗力を強制的に上昇させるなどの方法で血清を入手する筋道が最も現実的らしい。

レジスタンスとベルダが血清の製法を確立し公開できれば、CS計画の遂行によって政権を安定させているエルドラムの独裁体制にも対抗することができるようになるだろう。

私達がやったことといえばデータのサルベージとベルダの輸送だけが、それだけでもランビュランス人類の未来には、大きく貢献できたようだ。

だが。未来は、あくまで未来だ。

リーシュは、私が私の身にこれから起こることを悟っていることを理解して、防疫服の中で涙をためて声を震わせた。

「でも、艦長をコールドスリープする決定は、覆らないって」

それはそうだろう。

私は封じ込めが成功したはずの本星にウイルスを持ちこんでいるのである。

しかも、クレーマン博士やエルドラムの実験成果を実用段階に持って行くのは、まさに今日が出発点なのだ。

実際に灼死病に対する有効な対処法が確立されるまでには最低でも年単位の時間がかかる

だろう。

方法を確立したら、今度はそれを啓蒙し、広報し、設備投資し、生産ラインを確立する作業が待っている。

人的資源が極めて限られるランビュランス本星の、しかも反エルドラムレジスタンス達がそれを為そうとするなら、下手をしたらベルダが老人になるまで待たなければならないかもしれない。

そして、今のままでは、私はあと数日もせずに死んでしまう。

「こんなのって……こんなのって、ないよ……艦長……」

私の方にリーシュが手を伸ばすが、その手は、防疫服を纏ってなお、それ以上は接近してはならないと定められて引かれているぶ厚い隔離カーテンに遮られ、私には届かない。

この星に降りてまだ二日目。

私が灼死病に罹患したと知った仲間達は、必死で私を治療しようとしてくれた。

リーシュも、ミュリアも、ネルも、それぞれの体系に基づく治癒紋章術で対処を敢行し、その全てが無駄になった。

治癒紋章術の祖であるネーディアンに属するウイニー、そしてレナの力すら、灼死病には及ばなかった。

連邦史屈指の治癒紋章術の使い手であるレナ・ランフォードの力が及ばないのであれば、もはや我々に打つ手はない。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

何を謝っているのだろう。掠れる声で問うと、リーシュは嗚咽混じりに答えた。

「あたしが、あたしがパルスタワーになんかこだわっていないければ、艦長は！」
それは違う。

メーアでパルスタワーを発見したとき、既にこうなることは決まっていたのだ。

連邦軍人として、一人の人間として、私はランビュランスの盗掘行為を許せなかった。

仲間達も志を同じくして、ついてきてくれた。

パルスタワーと、ランビュランスを追う道行きの中で、私とリーシュとコロと、リーシュが招いた大勢の仲間達の絆は深まって行った。

結果的に私は灼死病に罹患してしまったが、それはもう、仕方のないことだ。

そのことに、全く後悔はない。

それでも残念なことを強いて挙げるなら、保護したリーシュを故郷に送り届けることができなくなったことと、これ以上、仲間達と宇宙の旅を続けられなくなったことくらいだ。

私はリーシュに、私の軍服がどこにあるかを尋ねた。

「……えっ……艦長の服は、すぐそこにあるわ。厳重に保管されてるけど」

その軍服のポケットに、あの石が入っている。

私がそう告げると、リーシュは息を呑んだ。

ベルダと出会ったあの宇宙基地での戦闘で、偶然拾ったものだ。

あの石があれば、リーシュは彼女が置かれた現況に対応できる優秀な人間をピックアップして召喚できることは、コロも指摘していた。

だからその石を使って、呼んで欲しい人物がいる。

「それって、どういう……」

私がここで脱落すると、GFS S・3214Fにはフィデル以外の銀河連邦軍人がいなくなってしまう。

だがフィデルはまだ士官学校生であり、本来であれば戦闘艦への乗艦資格すらない。

今現在艦の指揮権を持っていることすら、本来は超法規的措施なのだ。

だから今後の地球への道中で、GFS S・3214Fの運行に責任を負うことができ、かつコロが連邦法を捻じ曲げなくて済むような人材を召喚してほしいのだ。

「待って、待ってよ。それって……」

銀河連邦軍人としての経歴を積み重ねた者なら、誰でもいい。

時を越えるリーシュの力があれば、よりどりみどりのはずだ。

地球人類初のワープ航法を成し遂げたステイプ・D・ケニー。

惑星ロックの危難を救ったロニクス・J・ケニーやイリア・シルベストリ。

惑星ファージェットとの戦いを終わらせたスターダスト作戦を指揮したベイズ・ゲイリー。

レナに並ぶ十二英雄であるクロード・C・ケニー。いずれも連邦史に欠かすことのできない勇者達だ。

現代の人間に絞るなら、クロノス事変の功績を讃えられて提督に昇進したエマーソン大佐を呼べたら万々歳だ。

エマーソン大佐なら、フェイクリーディアンズのフィデルともうまくコンビネーションを取ることもできるだろう。

また彼に関する風の噂として、女性に対して極めて紳士的であり、女性からの評判も極めて良いというものがある。

きっと、女性の比率が多い我が艦も上手く取り回すことができるはずだ。

冗談半分、本気半分ではあるが、とにかく私の代わりに、艦長役を務められる者を召喚してほしいのだ。

そうすれば私は心置きなく、ランビュランスの技術で未来に向かい眠ることができる。

「……………」

分かっている。リーシュが、こんなことを言われてはいそうですかと納得できる性分ではないことくらい。

だが、やってもらわねばならない。

そうでなければ、私がここまでやってきたことが無駄になってしまうのだ。

せめて私の意識があるうちに、私の後を継いでくれる人に全てを託したいのだ。

「……そんなの、ダメだよ」

ダメでもなんでも、やるんだ。それしかないのだ。

「できない。あたしにはそんなこと、できない」

叫ぶリーシュは、突然防疫カーテンを乱暴に払いのけて、私の傍らに駆け寄ってきた。

防疫カーテンを抜けた者がいることを知らせる警報が鳴るが、リーシュは構わなかった。

暑苦しい防疫服を脱ぎ捨て、驚く私の手を強引に掴み持ち上げる。

熱で関節が痛むのをこらえながら私はリーシュを止めようとするが、リーシュの耳には入らない。

「あたし達の……あたしの艦長は、あなただけなのよ」

涙を一杯に溜めた美しい虹色の瞳が私を見下ろし、そう吼える。

「何事じゃ!？」

警報を聞いて防疫服も着ずにベルダが駆け付けたのは、ちょうどそんなときだった。

「こ、これは……!!」

「あたしが、絶対に助けてみせる!!」

「リーシュ! 下がるのじゃ! 灼死病が……!!」

「灼死病なんて関係ない!! 過去の勇者なんて知らない! 英雄なんて呼びたくない!

こんな別れなんて、絶対に認めない!」

その瞬間、リーシュの足元から風が巻き起こり、灼死病に冒された身体にすら明確に感じられるほどの強烈な紋章力が放射され始める。

「あたしは……あなたが……」

轟音と、紋章力と、光の放射に、私は目を開けていられず、熱に浮かされた耳は空洞音ばかりを響かせる。

ベルダの叫びすらもはやかき消す光の奔流が私の全身を包み、或いは挟り、粉々に分解しているかのような錯覚を覚えた。

そんな中で、やけにはつきりと聞こえた声があった。

いや、それはもしかしたら灼死病に浮かされた頭が聞かせた幻聴かもしれない。

リーシュでも、ベルダでも、もちろん私でもない声が、そう言ったのだ。

『許可された』

と。

※

私の足元を、不気味な青いタヌキダルマが目からオイルを垂れ流しながら右往左往している映像が、先程から延々と垂れ流されている。

「うわああああああああん！！ 艦長が！ まさか！ こんなに！ 元気に！ 復活するなんてええええええ！！ よかったですよかったですううう！！ 僕は艦長に何かあったら後を追って橋から身を投げる覚悟でしたあああああ！！」

艦橋から出られないコロが身を投げる橋は一体どこなんだと突っ込むと、

「そんなツツコミも嬉しいiiiiiiii！！ 今日のは祝いのバナナです！ 開けちゃいますよ！ 食べちゃいますよ！ うわああああああああん！！」

今日の前にあるコロの映像は、軍服のデバイスが投影しているホログラムだが、映像自体は実際に艦でのコロの行動とリンクしているのだという。

きっと今頃艦橋が、コロの垂れ流したオイルでべたべたになっているのかと思うと、折角元気になった体にどっと疲れが押し寄せてきた。

そう、私は今、元気になっているのだ。

「全く……一日経った今でも、全く信じられん……」

呆れているようにも、感心しているようにも見えベルダは、今私の体に繋がっているバイタルチェック機器類をモニターしながら唸っていた。

「何がどうなってるのか全く分かんが……間違いない。これは、抗原じゃ。灼死病の血清なんじゃ……」

私の体は、完全に灼死病を克服したらしい。

熱は下がり、体の痛みも消え、私の血液中には灼死病ウイルスに対する抗体、すなわち血清の元が精製されているというのだ。

原因は考えるまでもない。リーシュの紋章術が、また一つ意味不明な奇跡を起こしたのだ。

リーシュが今どうしているのか尋ねると、私の病を回復させてから倒れてしまい、今は艦に戻って休養しているそうだ。

流石に昨日の今日で外出許可は下りなかったので、後で礼を言っておかねばなるまい。

血清が確認されてからというものの、レジスタンスは上を下への大騒ぎだった。

ランビュランスが80年求め続けてなお手に入れられなかったものが、柵から牡丹餅的に突然降って沸いたのである。

情報の取り扱いには慎重を期さねばならず、即座に箝口令が敷かれたことは言うまでもない。

ランビュランス人は、多かれ少なかれ大抵は灼死病に身内の命を奪われ、或いは凍結させられている。

血清がある、などという話が流布すれば、まだ培養方法すら確立されていない最初の血清を巡って争いが起こるのは必至だからだ。

私はその懸念を告げると、ベルダは心得たもので、「安心せよ。レジスタンスとは言うが、人は少なくセキュリティは色々な意味で万全じゃ」と寂しげに言った。

「この血清はまだ素体の段階じゃが、お前さん達がサルベージしてくれたじいちゃまとエルドラムの研究データが、培養の大きな助けになるじやろう。お前さん達には、本当に頭が上がりらん」

ではこれで、もうランビュランスがパルスタワーを作る必要もなくなるということだ。

「その通りじゃ。もちろんいくつかの関門はあるが、まずは然るべき手段で血清の実用化への一步を踏み出したことを告知せねばならん。そのために、エルドラムとコンタクトを取る必要がある」

独裁政権と言えど、政権は政権である。

エルドラムが政権を取るに至った経緯はともかく、現状のランビュランスでは各所に不満を貯めつつも、統治機構としては一応の安定を実現している。

だが血清の出現は、正と負の両面に於いてエルドラムの治世に楔を穿つだろう。病に怯える必要のない世界を、民は歓迎するだろう。

だがその世界をどのように迎えるかは、エルドラムと、ベルダ達、そしてランビュランス人の冷静さ如何にかかっている。

エルドラムが政権の安定のために、血清の存在自体を隠蔽するかもしれない。

ベルダ達が、血清の製法を独占して新たな独裁体制を敷くかもしれない。

民衆が血清の希少性に耐えきれず、暴動を起こすかもしれない。

惑星国家として、最も犠牲が少なく済む血清配布の道筋を論じることができるのは、現状エルドラムとベルダしかないのだ。

「お前さんも、なかなか意地の悪いことを言うのう。わしらが独裁か。無い、と言いたいくらいじゃがな」

ベルダは苦笑するが、それが絶対にありえないことではないと、聡明な少女はよく分かっていた。

だが、エルドラムが灼死病封印のためのCS計画をちらつかせて恐怖と抑圧による安定を図ったように、血清製造の担い手には、救世という名の独裁が可能になるのだ。

もちろん、エルドラムがまるごと製法をベルダ達から奪い、独裁をより強固に進めるという可能性も考えられる。

だが、いずれにせよ、エルドラムとの接触は不可避の事態だ。

そしてランビュランスの後世の安寧のために、ベルダ側からエルドラムに先制攻撃を加えることだけは、絶対にできない。

「分かっておる。そこで、相談なのじゃが……」

言い出しにくそうなベルダに代わって、私はその案を披露した。

私の名を出してエルドラムに打診し、私が交渉の窓口となる。

それは血清製造が可能になったランビュランスの時代に移行する、不可欠なプロセスであろう。

「何から何まで、お前さん達におんぶにだっこで、恥ずかしい限りじゃ」

こちらとしても、最初からパルスタワーの建設をこれ以上させないことが目的だったのだ。独裁者とレジスタンスの仲介役をすることでその目的が達成できるのなら、我々にとっても利があることになる。

「お前さん達が得るものなど、何もなかるうに」

いいや、十分過ぎるほどある。

地球人であり、銀河連邦軍人である私の率いるチームの力で窮地を救われた星が、宇宙のどこかにある。

今ではない遠い未来、もし銀河連邦がランビュランスとファーストコンタクトをしたとき、ランビュランス人達は、遠い昔に星を死の病から救った者達のことを、きっと覚えていてくれるはずだ。

そのときランビュランスは、銀河連邦が友好的な国家連合であると理解するだろう。

銀河連邦は、ランビュランスが友好的な星であると理解するだろう。

私とコロと、リーシュと仲間達は、その遠い未来に出会う人々が諍い無く手を結ぶための希望の燈火を、この星に置くことができるのだ。

これ以上の利が、私にあるだろうか。

「……まったく、臆面もなくむず痒いことを言いおって」

ベルダは顔をくしゃくしゃに歪めて微笑みながら、涙を少し拭った。

「そういうお前さんじゃから、リーシュもきつと強くなれたんじやろうな」

それはどういう意味だろうか。

「そのままの意味じゃよ。さて、もう少し艦長は横になっておれ。わしは今後の方針を決めるための会議に出席せねばならん」

まるで老齢の政治家のようなことを言いながら、ベルダはひらひらと手を振り去って行く。

私は素直に横になりつつも、コロにエルドラムと接触するための文章を地球語とランビュランス語の二通りで用意するよう命じた。

「いよいよ最終決戦ですね！」

決戦であることには間違いないが、独裁政権を武力で倒さねばならないという決まりはない。

エルドラムがベルダの言うような過去を持つているのだとしたら、話し合いで彼を政権から降りさせるのもまた一つの戦いと言えよう。

「りようかあいつ！ それじゃあ僕は、文章作成に入りますね。ネルさんがそういうのに詳しいようですので、また後でチェックをお願いしますあす」

コロのホログラムが消え、私は今度こそ横になり、大きく息を吐いて目を閉じた。

辺りには、私のバイタルチェックモニターの音が、規則的に響く音しか聞こえなくなる。

「のうリーシユ、行つてやらんのか？」

.....

「いやはや大した奴じやのう。あの大局眼、真つ直ぐな心根、理想を語る面構え、広い度量、なるほど艦長と慕われるには十分過ぎる器じや」

⋮

「まだ若いじゃろうに、少々達観しすぎて朴念仁が板についておるのが玉に瑕かもしれんがそれもまた魅力と言えば魅力なんじゃろうのう」

「…………ベルダに若いとか言われたくないでしょ」

「にやつはっは。わしのこの口調はじいちゃま譲りだな。大好きな人をずっと見ておるとつい色々な癖を吸収してしまうんじや。お前さんにもそういう覚えはないかの？」

[.....]

「それで？　行つてやらかんのか？　まだ起きておると思うぞ？　自分が元氣になつたのはりーシュのおかげだと分かつておつたようだし、礼を言いたいとも言つておつた」

「……ムリ」

「何がじゃ」

「顔、合わせらんない」

「意味が分らんのお」

「あたし、自分が何言ったか覚えてない」

「ふむ」

「無我夢中で、なんか、気が付いたら全部終わってて、でも、何かあたし、とんでもないこと走っちゃったような気が……」

「わしは覚えとるぞ。全部聞こえておった」

[illegible]

「いやあまるで映画のワンシーンを見ておるかのような気分じやった。奇跡が起こるときそこには必ずあるのじゃな、人の想い、いや、むしろあ……」

「やめてつてばあああああ！ あたし覚えてないから！ 何も覚えてないから！」

「あんまり叫ぶと艦長に聞こえるぞ？」

「んぐっ……!!」

「わしはいたく感動したんじゃぞ。この奇跡を起こしたのはリーシュの無償のあ……」

「ベ・ル・ダ！ ベルダ、そこまで、そこまでよ！ あたし艦に戻るから、これからのこと、みんなと相談してくるから！ いいわね！ 艦長に余計なこと言わないでよ！」

「余計なこととはなんじゃ……つて、ああ、行ってもうた。くふふ、ちいとからいすぎたかの。さて、いかんいかん、会議に遅れる」

バイタルチェックのモニター音に聞き入っていた私は、静かになったのを見計らい、毛布を深く被り直したのだった。

※

その報せは、唐突に舞い込んできた。

灼死病から復活して4日。

もはやすっかり回復し、少しだけよそよそしい瞬間がありつつもリーシュとも以前のよう

に話すようになってきた頃、ベルダが艦に駆け込んできた。

「エルドラムが会談を申し入れてきた。しかも、艦長を名指しでじゃ！」

「エルドラムが！？」

艦内がざわめく。

「まだ艦長名でのこちらからの会談申し入れはしてないわよね？」

「ああ。レジスタンスの稟議にかけられたまま、明日可決されるはずだったんじゃが、我々の代表者として艦長を指名し、ランビュランスの今後について話し合いたいと言っておる」

私は思わず顔をしかめ、ついでネルが小さく舌打ちをした。

「やられたね」

「どういふことじゃ」

「こいつは会談申し入れの皮を被った脅しだよ。文面、見せてもらえるかい？」

ネルは、ベルダが読み上げた申し入れの文書を見て、眉間にしわを寄せる。

「灼死病の血清についても書かれている……これはもう、決定的じゃないか」

「どういふことですか？」

レナの問いに、私が解説する。

単純な話で、レジスタンスの行動は機密まで含めて全てエルドラムに漏れていたのだ。そうでなければ、私を直接名指しする意味がエルドラムにはない。

つまり彼はこう言っているのだ。

こちらの動きを全て知っている。言うことに従わなければ、即時強硬手段に出る、と。

「スパイがいた、ということかの」

「そうでなければ、最初から泳がされていたか、だね。どうする艦長。元々会う気ではいたわけだけど、あからさまな罠に突っ込んでいく予定は無いだろう？」

当然、会談の場に赴くのは非武装という条件が課されている。

エルドラム側も非武装だということだが、それをそのまま信じられるほど私もお人好しではない。

「私とタイネーブさんなら、非武装でも戦えますよ」

拳を武器とするレナがそう申し出るが、私はそれに即応しかねた。

この会談の申し入れそのものは、レジスタンスの動きを封じるための布石だろう。

だが、それならレジスタンスの代表や、血清精製の責任者たるベルダを指名すればよさそうなものでもある。

そこを避けて敢えて私を指名する意味とはなんだろう。

確かに私の体は血清の元ではあるが、既にベルダが培養に着手しており、実験的ではあるが生産ラインも確保されている。

私を拘束したところで血清生産は独占できないし、止めることもできないはずだ。

いや、止めることに目的があるとしたら……？

病への恐怖とCS計画によって維持されている権力を守るためには、私とベルダが作る血清の存在は邪魔でしかない。

血清の元となる私の身柄を押さえ、ベルダ達に軍を差し向ければ、血清の存在そのものを明るみに出さずにエルドラムの政権は盤石のまま続くことになるだろう。

「エルドラムは血清の存在を無かったことにしようとしてるってこと！？」

「旧政府がじいちゃまにしたことをそのままわしにしようというのか……エルドラムは一体何を考えておるのじゃ、そんな、そんな愚かなことをする男ではなかったはずじゃ！」

だが、他に考えようがない。

いっすすがすがしいまでに『悪の独裁者』を地で行くエルドラムの考えていることなど、私には推測のしようもなかった。

「エルドラムは、パルスタワーを止めようとしたじいちゃまの意志を継いでいたはずじゃ！パルスタワーの危険性に気づいたじいちゃまが無人星から脱出しようとしたとき、手引きをしたのがエルドラムだったんじゃ！ 乗り込んだ輸送船が政府が差し向けた憲兵隊に撃墜されて座礁しかけたのを、政府の監視の目をかいくぐって救ったのもエルドラムの手配じゃった！ あの演説の場に行こうとしたじいちゃまを最後まで止めようとしておった。何故……何故じゃ……！」

ベルダの悲痛な叫びに誰もが言葉もない。

だがそのときフィデルが、ふとあることに気付いた。

「暗礁地帯で座礁って……艦長、もしかして、あのとき僕らが調査した船って」
私も丁度、同じことを思い出していた。

私達がランビュランスの詳細を知ることとなったあの廃棄された輸送船。

工具でこじ開けられたあのキャビンにいたのは、もしかしてベルダの祖父クレーマン博士だったのではなからうか。

では、あの輸送船は一体どこからクレーマン博士を運び出そうとしていた？

「悪魔の装置ってどこかで聞いたことがあると思ったら、あれじゃない？ パーチェで拾った無線通信の音声」

そこで、ミュリアがまた一つ線を繋げる。

パーチェで拾い、暗礁地帯で聞いたあの音声は、パルスタワーを悪魔の装置と弾劾し、誰かに止めてくれるよう懇願していたあの男性の声は……。

私はフィデルに言って、あの船から拾い上げたものを持ってきてもらう。

「なんじゃ、これは……」

破れて埃で薄汚れたバーニイ柄の包み紙を受け取ったベルダは呟く。

「確証はないんだけど……僕は以前、クレーマン博士の声を、聴いたかもしれないんだ。」

コロ

「……はい。こちらが、その音声です」

コロが神妙な顔つきで、あの音声を再生する。

『CS計画を止めなければ……。パルスタワーは惑星に死をもたらす悪魔の装置じゃ……』

「じいちゃま!!」

ベルダの悲鳴が、艦橋にこだまする。

『今も3つのタワーがこの星を飲み込もうとしておる……。誰か頼む、あれを止めておくれ』
悲痛な訴えは誰にも届くことなく、クレーマン博士は非業の死を遂げた。

「ああ……そうじゃ……エルドラムは、この声を聞いておった……慌てて、じいちゃまを迎えに行こうとして、わしも、何年も会えなくて、どうして忘れていたんじゃ……エルドラムは、必ずじいちゃまを助けてみせると、わしに……」

膝から崩れ落ちるベルダを、私は慌てて支える。

「エルドラムは……わしの、父親だったのじゃ……」

艦橋が騒めくが、ベルダの独白は続く。

「本当の両親は、灼死病でわしが物ごころつく前に世を去った……じいちゃまの助手であつたエルドラムが、わしの、父で、母で、兄で、家族で、エルドラムの作ってくれるきのこスープが、わしは、大好物で……!!」

「ベルダ……」

「何故じゃ……何がどうなっているんじゃ……わしには分らん。エルドラムは、権力のた

めにじいちゃまの命すら利用したのか？　わしらに見せていた顔は、全て偽物だったのか？　嘘だったのか？　分からん……分からない……分からないよお……じいちゃま……」

その瞬間、ベルダ・クレーマンは灼死病研究の第一人者から、家族の変節を受け入れられずに混乱する一人の少女に戻っていた。

バーニイ柄のプレゼントボックスを掻き抱き、私の胸に縋りつきすすり泣くベルダを、私は抱きしめることしかできなかった。

「……行きましょう、艦長」

そのときリーシュが決然と言い、私とベルダは顔を上げた。

「行ってやりましょうよ。行って、あたし達の仲間を泣かせてまで何をしたいのか、きっちり締め上げて吐かせてやりましょう」

「……一応、聞いておくわ。計算あつてのことじゃないわよね？」

艦のブレーキを自認するミューリアが、アクセルたるリーシュを一応諫めようとするが、本当に一応でしかないのは明らかだった。

「当たり前じゃない。だって何も分からないんだもん。分からないときは、行動あるのみよ。あたし達、これまでずっとそうしてきたじゃない」

「違うないんだけどね。今回は艦の仲間だけじゃない。ベルダ達や、ランビュランス人の未来がかかっているのよ。エルドラムに会うのは賛成だけど、全くの無策で感情の赴くままっていうのは、流石に賛成しかねるわ」

「無策じゃないわ。一応、考えはある」

また出た、一応、だ。

とりあえずその策を拝聴しようと先を促すと、リーシュは拳を握って勝気に言った。

「力勝負よ。どうせ向こうは約束を守る気なんか無いんだもん。こっちの力をバシッと見せて、うかつなことをしたら自分の身が危ないってことを分からせないよ」

「で、でも先にこっちから約束を破ったら、その分交渉が不利になりませんか？」

おずおずと言うタイネーブの横で、ネルが難しい顔で首を横に振る。

「いや、そうとも限らないよ。こっちからの申し入れがまだ向こうに届いていない以上、お願いする立場にあるのは表面上はエルドラムで、こっちは請われて出向くんだ、だったら私達から条件を突き付けてやることは、約束を破ることはないよ」

「う、うーん……なんか屁理屈のような気がしますけど」

「政治や軍事なんでものは、つまるところ壮大な屁理屈合戦でしかないよ」

それを言っただけだが、その通りだから困ったものだ。

「いいじゃないか。もちろん最初は紳士的に。いざとなれば一点突破で押し通る。班を二つに分ける必要があるね。エルドラム側に行く側と、ここを守る側と」

「あなたの案は筋が通っているけど、正規軍を相手にすると、ある程度の指揮能力や状

況判断能力が求められるわよ。どうやって分けるの？」

ミュリアの問いに、ネルは自分を指差す。

「私で良ければ、私が残るよ。これでも一軍の長だ。防衛戦くらいは、なんとかかなると思う」
「待って下さい。エルドラムも国家の長です。ネルさんは、艦長に着いて行った方がいいと思います。罌を警戒する上でも、ネルさんの能力は今回は現場で生かすべきだと思います」

ネルの運用に反対意見を述べたのはフィデルだった。

「なるほどね、正規軍の武器には大型兵器がある可能性もある。先進惑星の兵器知識がないと、いざというとき判断に困るかもしれないわ。この艦全部の武装ってなると、流星にこの前のベーベンみたいに簡単にはいかないわよ」

「ん……そう来られると弱いね。なら、どうする？」

ネルもフィデルとミュリアの意見には納得したようで、立候補を取り下げる。

ミュリアはフアブリークの例があったようにやはり現代兵器に疎く、フィデルは指揮能力という点で不安を吐露した。

タイネーブやウィニーやレナも言わずもがな。

「……こんなときこそ、あたしの出番じゃないかしら」

そこに、おずおずと口を挟んだのがリーシュだった。

「ねえ艦長、こういうことならあたし、やるわ、召喚。いいでしょ？」

一度私の申し出を断ったことを気にしているのだろうか。

私はベルダを落ち着かせて立ち上がると、ポケットにおさめっぱなしの、あの虹色の石をリーシュに手渡した。

私達の絆を強固に結ぶ、紋章の石。

最後にもう一働き、してもらおうじゃないか。

求められるのは拠点防衛の経験を持つ、先進惑星の軍事情に精通した、リーダーシップのある人間。

レクリエーションルームに虹の光が舞い降りたとき、リーシュの召喚を初めて見るベルダはその不可思議な現象に目を丸くする。

もう一人、新たに呼び出された人物に特別な反応を見せた者がいた。

レナが、光の柱から現れた人物を見て、静かに傍らに歩み寄ったのだ。

柱の閃光が消えれば、私にとってはそれはむしろ当然のことのように思えた。

私は今、伝説そのものの姿を目撃していた。

広大な外宇宙が100億もの人間の様々な夢を受け止め、その上で更に見せつける無限の可能性の、その象徴たる人物。

レナから掻い摘んだ事情を聞いたその青年は、少しだけ困ったような顔をしつつも最後には笑顔で頷いた。

「まあ、何とかなるか」

クロード・C・ケニー。

それが光とともに現れた、新たな勇者の名であった。

私の留守役としては豪華すぎる人選に狼狽するが、レナと過ごした時間のおかげで、私もコロもさほど緊張感なくクロード・C・ケニーと接することができた。

それにしても、冗談で言っただけの人選を本当に召喚してしまうあたり、リーシュの力は底が知れない。

だが、クロードの存在によって艦と仲間の安定感が圧倒的に高まったことは間違いない。十賢者事変当時、少尉官だったクロードは、伝説の戦艦カルナスの乗員だった。戦闘艦や先進兵器の運用に理解があるだけでなく紋章術への理解も深く、会得している戦闘術は剣、銃、拳法と非常に幅広い。

後の歴史では私と同じような深宇宙探查任務につき、艦長職を拝命したはずだが、召喚されたクロードはレナと同じく十賢者事変直後、少尉官当時のクロードのようだった。

「惑星を蝕む病を取り除くために、敵の親玉と対峙するって、なんだか父さんのことを思い出します」

現状の年齢感では私の方が年上なのだが、あのクロード・C・ケニーに敬語を使われるのは何とも落ち着かない。

言われてみれば、確かに今の私の状況は、クロードの父親であるロニキス・J・ケニーが惑星ファージェットの独裁者ジェ・リヴォース打倒のためにスターダスト作戦に従事したときの状況に似ていなくもない。

だが、今回の我々のミッションは、暗殺ではなく交渉である。

エルドラムは、ただの悪の独裁者ではない。

ベルダにとってはこの世で唯一残った、かけがえのない家族なのだ。

どのような経緯で今のように変節してしまったのか、その真実を含め明らかにし、その上でエルドラムに穏便に政権から降りてもらうまでが、我々が企図する目標だ。

「でも、僕に艦の防衛と指揮を任せるといことは、その計算通りに話が進む可能性は低いってことですよね」

残念ながらその通りではある。

だが、それでも一度は挑戦してみなければ、ベルダに合わせる顔が無い。

「分かりました。僕も大概無茶をしてみましたし、艦長の気持ちちはよく分かります」

そう言っただけ、クロードは、腰の剣に手をかける。

「できるだけ、こいつを抜くような事態にはなって欲しくないと思ってます。艦長の善戦を

願っています」

己の武器の力を過大に評価するような発言は普通の人間が言えば誇大妄想狂のそれだが、クロードの場合は冗談でもなんでもない。

彼の腰にある剣の名は、セイクリッドティア。

エナジーネーデの技術の粋を集めて作られた、反陽子兵器なのだ。

そのことを確認すると、クロードは目を丸くする。

「本当に何でも知られちゃってるんだなあ……こりゃ、これから変なことできないな」

クロードはレナと顔を合わせると、困ったように苦笑する。

その仕草は、19歳の青年そのものの顔であった。

私とクロードは艦とレジスタンス拠点の防衛作戦について細かく打ち合せてから、ベルダにエルドラムへの返答を送るよう頼んだ。

エルドラムからの再度の返信が来るまでの間、ベルダも、レジスタンスも、我が艦の仲間達も、思い思いの過ごし方をしたが、その表情には一様に緊張が見て取れた。

そして、再度の返信が訪れ、会談の場所が決定する。

「……エルドラムめ。妙な場所を指定しおって」

ベルダが顔をしかめながら、私に件の場所の地図を差し出した。

レジスタンスの拠点からそう離れていない平原のど真ん中。

今は凍り付いて見渡す限りの凍土だが、その平原の中心に一つ、大きな建造物があった。

「我らランビュランス人が、罪過の道の第一歩を踏み出した場所じゃよ」

ベルダの声は、沈んでいた。

「じいちゃまが主導して建設した、パルスタワー一号機跡地じゃ」

※

凍りついた塔は、いかにも初期ロットじみた、不恰好な垢ぬけなさを感じた。

これまで何機ものパルスタワーを見てきた私は、いつの間にかパルスタワーの年代を図る審美眼を身に着けてしまったらしい。

「ここに、エルドラムがいるんですね」

フィデルが塔を見上げ、

「今度は逃がさないよ」

ネルが毅然と宣言し、

「どこから何が出て来ても、いつでもお相手してあげるわ」

周囲を見回すミュリアは気合い十分だ。

私、フィデル、ネル、ミュリアの4人が、エルドラムとの会談に臨み、残るメンバーは艦

で待機。ランビュランス軍の動向に注意を払うことに決まった。

リーシュは同行を希望したが、私がそれを止めた。

リーシュの紋章術には、普通の紋章術には無い奇跡を起こす力がある。

ならばその力は、最も安全な場所で緊急事態に対応できるような待機しなければならない。

そう言う私にリーシュは食い下がったが、ベルダが、

「信じて待つのも、信頼と愛の証じゃぞ」

と言うと、何故が途端に顔を真っ赤にして引き下がった。

艦で待つ彼女達のためにも、私達は絶対に帰らねばならない。

広大な氷の平原は極めて見通しが良く、一見して伏兵の類は見当たらないが、旧い故に大きな塔の中には、どれほどの兵が潜んでいるか見当もつかなかった。

『あのパルスタワーは、稼働しているようです。妨害波が強くて、内部をスキャンできません。どれほどの手勢が潜んでいるか分かりませんし、僕との通信が遮断される危険も十分に考えられます。ご注意ください』

コロの口調もいつになく真剣だ。

私が了承の意を示すと、ネルが私の肩を叩いた。

「緊張しているね」

その問いに、私は素直に頷く。

艦長と呼ばれていても、連邦軍人としては若きクロードと大差のない権限しか持ち合わせていない一将校の私に、星の運命を背負った会談が任されるなど、とんでもない話だ。

そう告げると、ネルは笑顔で頷いた。

「うん。いいんじゃないかい？」

どういう意味かと問うと、ミュリアが解説を加える。

「そのままでの意味よ。重要な局面で緊張しない人に、いい仕事はできないわ」

そういうものだろうか。

偉人と呼ばれる類の人々は、皆どんなときでも泰然としているものだと思っていた。

「僕の仲間に、立場もあって頼りになるとても勇敢な人がいるんですが、戦いの前にはいつも悩んで、緊張していました。戦いに対する自分の正義のあり方を模索しているみたいで、その姿を見たとき、僕もきつとそうやって悩みながら戦っていくんだろーうと思いました。その仲間は今も、悩みながら銀河連邦で剣を振るっています。誰もがそう見えないだけで、いつも使命の前には緊張しているんだと思いますよ」

穏やかなフィデルの言葉が、耳に心地よく馴染む。

今更ながら、これまでこうして仲間達に支えられて宇宙を渡って来たのだと実感する。

緊張は解けないが、迷いは晴れた。

行こう。

エルドラムが待っている。

私の号令で、3人も歩き出す。

そこだけ溶かされたように暗い氷の穴を開けている。パルスタワーに踏み込むと、内部の照明が点灯すると同時に、背後で扉が閉まった。

コロに小さく声をかけるが、予想通り通信も遮断されてしまっているようだ。

同時に私達のいるフロアより一つ上の内壁のテラスから、無数のフェイズガンがこちらに銃口を向けていることに気が付く。

「まあ、想像はしていたけどね」

私達は即座に4人背を合わせ、どの方向から攻撃されてもいように身構えた。

「よく来た。招かれざる異星の闖入者よ」

だが予想していた攻撃は来ず、代わりに私達の正面に現れたのは、白髪、眼帯の偉丈夫であつた。

「……エルドラム」

フィデルの小さな声が、私の耳を打つ。

「貴様があの艦の責任者か。こそこそと宙域を嗅ぎまわり、随分と我らのCS計画の邪魔をしてくれたな」

「その邪魔も、今日限りだよ。あんたを倒してね」

ネルの宣言にも、エルドラムは動じない。

「事情はよく分からないけど、あなたは師を裏切り、小さな女の子を泣かせたことを自覚しなさい。あなたを愛してくれた人を裏切っている自覚があるのなら、今すぐ私達との交渉に応じなさい」

ミュリアも厳しい口調で弾劾し、最後にフィデルが口を開く。

「エルドラム。僕らはベルダ・クレーマンの想いとともここに来た。彼女はあなたがどうしてこんな暴挙に出たかを知りたがっている。あなたは独裁を行ったかもしれないが、もしそれがこのランビュランスにとって必要なことだったのなら、そう彼女に説明してあげてほしい。強引なCS計画の遂行も、事情が分かれば理解者はいるはずだ」

だが、フィデルの真摯な訴えも、エルドラムにはまるで響いていないようだった。

「くつくつく……ベルダ・クレーマンか。あの子供から何を吹きこまれたか知らないが、私は私の意志で今ここに立ち、これからも立ち続け、為すべきことを為し続ける。お前達はここで死ぬ。これ以上、私の目的の邪魔はさせん！！」

エルドラムの怒号とともに、周囲のランビュランス兵が一気に殺気立つ。

「来るよ」

「油断しないようにね」

「くそ……戦うしかないのか！」

「軍服の男だけは殺すな。血清の抗体さえ手に入れば残りは用はない。始末しろ」

私は、ベルダ達は既に血清の製法を手に入れている、と告げる。

だがエルドラムは鼻を鳴らすだけだった。

「それを放置するほど、私が甘いと思ったか。既にわが軍の精兵が、貴様らの拠点を襲撃している。ベルダと、血清製造ラインを押さえ、残りは全て凍結させる」

「ふうん、そうかい」

その宣言に、ネルとミュリアが、不敵な笑みを浮かべた。

「そっちこそ、私達の仲間を甘く見ないことね。火遊びが過ぎると、火傷じゃすまないわよ」

「言いたいことはそれだけか？ では、さらばだ」

エルドラムの掲げた腕が振り下ろされ、その瞬間、テラスに構えられた無数のフェイズガンの銃口が、一斉に輝きはじめた。

体を突き上げるような衝撃は、第一斉射が始まるよりも前に起こった。

「えっ」

「い、今のは」

「何の音！？」

私達が振り返ると、閉じられたはずのドアが歪な形に歪んでいる。

そして一瞬も間をおかず、新たな衝撃。

「何事だ！」

エルドラムも異常を察知したらしく、私達の背後で歪み始める扉を見て叫んだ。

だがランビュランス兵は一人も独裁者の声に応えることはできず、次の瞬間、扉がブチ破られ、外の冷氣とともに無数のバーベッドが一斉に塔に乱入してきたのだ。

「バーベッド！？ こ、こんなに沢山！」

「押しつぶされる！ 逃げるんだ！！」

その数は、第二宇宙基地で出会った数の比ではなかった。

あの広大な平原の一体どこにこれほどの数のバーベッドが潜んでいたというのか。

全身に突き立った杭を禍々しく光らせるバーベッドの中には、メーアで見た陸ガメや、第二宇宙基地にいた多脚戦車、それに暗礁地帯にいたゲル状生命体に加え、私達が今まで見たこともないような生物も無数に混じっていた。

「撃て！ 奴らをこれ以上暴れさせるな！！」

エルドラムの号令で、ランビュランス兵の目標が変更され、フェイズガンの光線が一斉に

バーベッド達に降り注ぐ。

私達はその間隙を縫うようにフロアの端に陣取ると、ランビュランス兵とバーベッドとの戦いをしばし静観した。

やはり、ランビュランスはバーベッドを支配しているわけではないようだ。

二足歩行のトカゲ、いわゆるリザードマン型のバーベッドが、恐るべき跳躍力で上階のテラスに飛びあがり、ランビュランス兵を襲い始める。

多脚戦車も砲身を上方に向けてミサイルや砲撃を加え、ゲル状生物に至っては分裂を繰り返しながら塔の壁面にへばりつき這うように上がって行くではないか。

当初こそ上方に陣取って戦いを優位に進めていたランビュランス兵だったが、次第に物量で押され始め、あちこちで悲鳴が上がり始める。

今まさに、一人のランビュランス兵がリザードマン型のバーベッドの爪の餌食になろうとしているところに、私はフェイズガンを発射する。

腕から先を消し飛ばされたバーベッドは怒り狂ってこちら目がけて跳躍してくるが、自由の利かない空中に身を晒せば、フィデルの剣から逃れられるはずがない。

体を左右に両断され絶命するバーベッドには一顧だにせず、フィデルは言った。

「待ってました艦長！ いいんですね！」

私が頷くと、嬉々としてランビュランス兵とバーベッドの間に割って入り、バーベッドを屠り始める。

「全く、艦長もフィデルも、バカがつくほどのお人好しね」

そう言いつつもミュリアが振るった杖が打ち砕くのは、ランビュランス兵の命を奪おうとするバーベッドだった。

「そんなバカだから、私達は着いて来たんだろう！」

ネルもまた、リザードマン型など問題にならない跳躍を見せ、次々に小型のバーベッドをダガーの投擲で仕留めて行く。

私はフェイズガンの出力を最大に引き上げ、かつ光線を拡散して発射することで、壁に張り付いたゲル状バーベッドを一体一体焼却処理する。

我々と、ランビュランス兵と、バーベッドが入り混じる混乱の中、

『艦長！ エルドラムが！！』

唐突にコロの警告が響いた。

バーベッドがパルスタワーのドアを破ったことで、通信が回復したのだ。

見ると、エルドラムに4体のバーベッドが群がっていた。

エルドラムは何やら携帯型のバリア兵器で籠城しているが、その中の一体がゲル状生物だったため、バリア内への侵入は時間の問題だった。

ここで、エルドラムをバーベッドに殺されるわけには絶対にいかない。

フィデルが剣から放った衝撃波が陸ガメに。

私が放った拡散フェイズガンがゲル状生物に。

ネルが放ったダガーがリザードマンに。

そしてミュリアが放った雷撃がエルドラムに肉薄する中型多脚戦車を同時に命中し、一度に殲滅する。

バリアの中で突然のことに瞬くエルドラムを放置し、私達はバーベッドの処理に戻る。そうでなければすぐにやられてしまいそうなほど、次から次へとバーベッドがなだれ込んでくるのだ。

もはや虚空から湧き出ているとしか思えぬ物量に、私達が底い切れなかったランビュランス兵が一人、また一人と倒されて行く。

私はふと気づいて、コロに艦の状況を尋ねた。

『もうこつちもしっちゃかめっちゃかです！ 最初にランビュランス兵がベルダさんの身柄を寄越せって大騒ぎした挙句に暴れはじめたと思ったら、一体どこに隠れてたのかもの凄い数のバーベッドが押し寄せてきて、あつという間に乱戦になりました！』

艦とベルダと血清製造ラインの安全は確保されているのかという問いには、

『ベルダさんは艦内に保護していますが、艦自体はもうボコボコにされてます！ あのベタベタが沢山いるせいで、シールドがあまり機能しないんです！ クロードさんが艦の武装を使わなければ、とても跳ね返せない物量です！』

戦闘艦のフェイズキャノンを使わなければ対処できないほどのバーベッドとは、一体どういうことなのか。

『レジスタンスの皆さんは圧倒的に武装が足りなくて、リーシュさんとタイネーブさんとレナさんが後方支援と前線維持のために戦っています。僕もクロードさんに砲撃権限を委譲されて、ビームビットを運用しているような有様です！』

戦いを覚悟していなかったわけではないが、コロやリーシュまで総動員しての総力戦になるとは流石に予想していなかった。

まるで我々の会談を狙いましたかのようなバーベッドの動きに、私はエルドラムとは全く異質な、異次元の悪意のようなものを感じずにはいられなかった。

『クロードさんは、いざとなればあれを抜くと仰ってるんですが……！』

クロード・C・ケニーにセイクリッドティアの使用を考えさせるほどの事態ということとは、向こうもどうやら余裕がある状態ではなさそうだ。

だが、こちらもなし崩し的にランビュランス兵を守ってはいるものの、エルドラムとは和解したわけでもなんでもなく、むしろ敵対状態のままである。

この場から逃げ出したところで事態は混迷を極めるばかりだ。

エルドラムを確保して、ランビュランス兵を見捨てて逃げるか。

それともここで共闘を続け、その事実を元に和解の道を探るか。

私の仲間達の力なら、いずれの道も可能だ。そう考えたとき。

『エル……ドラム……そこにいるのか』

恐ろしく場違いなのんびりとした声が、パルスタワーの中に響き渡った。

「何だい今のは！？」

私だけでなく、ネルにも、もっと言えばランビュランス兵達にも聞こえたようだ。

「ぐっ……まさか……！」

エルドラムも同じく声が聞こえたようで、その表情には動揺が走っていた。

『エルドラム……何の騒ぎだ……？』

エルドラムに呼びかけるその声は、老いた男性のものだった。

「この声……艦長、この声は、クレーマン博士の声じゃありませんか！？」

フィデルの指摘に答えたのは私ではなく、声そのものだった。

『おや、坊ちゃん知つとるのかい。このパルスタワーの研究で名を馳せた、このわし、ブラン・クレーマンの名を……』

知っている。この場にいる全員が、その名を知っている。

だが、一体これはどういうことだ。

クレーマン博士はエルドラムが政権を奪う直前に、民衆の前で殺されたはずだ。

何より、穏やかでありながら耳に残るこの不快で出所の分からない響きは何だろう。

館内放送といったようなものではない。

もっと神経の奥に直接語りかけてくるような、そんな声だ。

「知っています！ ベルダのお爺さんですね！ 生きていたんだ！」

フィデルの声に喜びが混じったことを、誰も責められない。

もしこの声の主がクレーマン博士なのだとしたら、ベルダの悲しみが一つ、和らぐことになるのだ。

彼女のことを思う私達にしてみれば、クレーマン博士の生存は何物にも代えがたい朗報の
はずだ。

だが、

『ベルダ……？』

老人の声が、一瞬にして剣呑なものに変わる。

異常を察したフィデルは、更に言い募った。

「お孫さんの、ベルダ・クレーマンです！ あなたの帰りを、ずっと待っています！」

フィデルの叫びに重なった声があった。

「やめろ！！ ベルダの名を出すな！！」

これまでになく必死の形相の、エルドラムであった。

「博士！ なんでもありません、お休みください！ お騒がせした非礼はあとで埋め合わせをいたします、ですから……」

そして独裁者らしからぬ言い訳を、姿が見えぬ老人に向かいくどくどと並べたてる。

だが、結果的に言えば、エルドラムのその場の言ひ訳は、老人には通用しなかった。

『ベルダ……ベルダ。わしの可愛い孫娘……ベルダ……ベルダ！　ベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダベルダ！』

「な、何なんだいこれは！！」

怒りと、怨嗟と、悲嘆が入り混じった呪詛の怒号。

それを直接頭に叩き込まれ、たまらずネルが耳を押さえてしまう。

そしてついに、決定的な一言が放たれた。

『貴様らが、わしの可愛いベルダを殺したのか！！！！！！』

「なっ……！」

「くそ……」

ベルダを殺した？

一体何の話をしているのだ。

[illegible]

『艦長！ パルスタワーの地下から、超巨大な生命反応が信じたい速度で上昇してきます！！』

コロの警告が終わるか終わらないかのうちに、それはバルスタワーのフロアの床を食い破り我々の前に姿を現した。

それは神話に語られる瑞獣、麒麟のような角と尾を持つ、禍々しき白き獣であった。

床を食い破ったついでに咥えこんだバーベツドを骨ごと嚙み砕き、その巨大な罅からおびただしい血を滴らせている。

『キサマラが……キサマラがベルダを……ユルサン！　ユルサンニンニン！』

「ちよつと待って！　これがクレーマン博士だとも言うの！？」

ミユリアの悲鳴はしかし、それが事実であると全員が認めるものであった。

獣の咆哮は、確かにベルダの名を呼んだ。

そしてベルダの名が呼ばれる度、その顎から血のような色の光線が迸り、その射線上にいる全ての者を呑みこみ跡形もなく消してしまふ。

「こ、こんなの、どうすればいいんだ!？」

ベルダの名を叫び暴れる獣に、誰もが手を出しあぐねていた。

だがこのままでは、エルドラムもろとも全員が消し炭になってしまう。

逡巡する私達に、新たな動機を与えたのは、なんとエルドラムであつた。

「逃げろ！ もはやこうなつては誰にも止められん！」

その声を契機に、生き残っていたランビュランス兵が出口に向かって駆け出し、それを追うバーベッドの生き残りが、白い獣との間に割り込んで血の光線を防ぐ壁となる。

「貴様ら、こちらへ来い！ 脱出路がある！！」

更にエルドラムは、私達に向けてそんなことを言い出した。

警戒している暇さえない。

暴れ回るクレーマン博士の声を出す獣に、誰もが対処できないのだ。

私達はエルドラムの後続き、あの獣が入れないほど狭い通路を通り、恐るべき破壊の音を背後に聞きつつなんとかタワーの外に脱出する。

「くそ……まさか、あの凍結処理を破って出て来るとは……」

脱出するとともに、エルドラムが苦鳴を上げて膝を突いた。

見ると、脇腹にかなり深い裂傷が走っている。

恐らくバーベッドとの乱戦の最中に負った傷だろう。

「最後の最後で、焦りで詰めを誤った、か、ぐ……」

「一体どういことなんだい！ あれは、あれがベルダの祖父だともいうのか！」

顔を伏せるエルドラムの胸倉を掴み、ネルが怒鳴る。

エルドラムの答えは、残酷すぎるものだった。

「……その通りだ。あれは……あの獣は……ブラン・クレーマン博士の、成れの果てだ……灼死病に冒され、遺伝子が根本から変異し、ほんのかすかな記憶だけが頭の隅にこびりついた、モンスターだ……」

「一体……一体どうしてそんなことに……」

「それが……ふふふ、分かれれば、私だって、こんなことは、しなかったさ……私は、ランビュランスも、宇宙も、どうなろうと知ったことではなかった。ただ……」

「おい！ エルドラム！ おいっ！！」

「ただ……私は、ブラン博士と、ベルダのため、だけに……」

その瞬間、エルドラムは頰れるように意識を失った。

死んではないが、この大量出血ではすぐに危険な状態になる。

私は未だ獣の咆哮が響く。パルスタワーを一度だけ振り返ってから、エルドラムを担ぎ上げた。

今、この男に死なれては、真実が全て闇の中に葬られてしまう。

絶対に、生きてエルドラムをベルダの前に連れて行く。

私達はパルスタワーに残った何もかもを放置し、ここまでやってきた小型艇に乗り込んで、最高速で私達の艦まで引き返した。

まるで、何かに追われているような、恐怖と共に。